大学の世界展開力強化事業（令和２年度採択）事後評価結果の総括

令和８年３月１６日
大学の世界展開力強化事業プログラム委員会

１．事業の趣旨

大学の世界展開力強化事業は、国際的に活躍できるグローバル人材の育成と大学教育のグローバル展開力の強化を目指し、高等教育の質の保証を図りながら、日本人学生の海外留学と外国人学生の戦略的受入を行う事業対象国・地域の大学との国際教育連携の取組を支援することを目的として、文部科学省において平成 23 年度から開始された事業である。

令和２年度開始の本事業は、新型コロナウイルス感染症の影響で、実渡航が大きく制限されるなか「アフリカ諸国との大学間交流形成支援」として公募が開始された。

アフリカ諸国は、豊富な天然資源に恵まれている上、12億人の規模の市場を抱え、近年ダイナミックな成長の最中にある。その成長のポテンシャルは、2020年代に人口で中国やインドを抜き、2030年には世界人口の5人に1人、2050年には4人に1人をアフリカ人で占めると言われている。また、大都市化の進行も顕著で、2050年にはアフリカの全人口の約50%が都市住民になると予測されている。2005年に初めて、各国のアフリカ諸国に対する投資額がＯＤＡを上回って以降、アフリカ諸国への投資は拡大しており、現在では開発援助先ではなく、ビジネスパートナーの位置付けにある。

日本との関係では、1993年以降、アフリカ開発会議（ＴＩＣＡＤ）を開催し、アフリカの開発をテーマに一貫した議論が継続されている。2019年8月に横浜で開催されたＴＩＣＡＤ７では、人間の安全保障とＳＤＧｓの達成に向けて、質の高い教育の提供を掲げ、科学技術イノベーション高度人材の育成やアフリカからの留学生の受入が提唱された。

日本とアフリカの大学間では、医療分野等での研究交流は一定程度進んでいるが、学生交流は欧米やアジアと比べて小規模にとどまってきた。近年のアフリカからの留学生の増加を考慮すると、今後、大学間交流を強固にしていく意義は大きいと言える。また、日本人学生にとっても、豊富な資源や広大なフィールドを活用した日本では実践できない教育を受けられるメリットは大きい。

上記を踏まえ、新型コロナウイルスという未曾有の制約下において、各大学が様々な工夫を加味した計画が提案されたものから、質の保証を伴った交流プログラムを実施する７件と、自ら交流を実施しながら、蓄積された知見や経験等を集約し、採択大学をはじめとした全国の大学等の活用に資するプラットフォームを構築する1件が採択された。

２．事後評価

この度、令和６年度に補助事業が終了したことを踏まえ、令和２年度に採択された８件の事業について、事後評価を実施した。

結果は、Ｓ（「事業計画を上回る成果をあげており、事業目的は十分に実現された。」）が１件、Ａ（「事業計画どおりの成果をあげており、事業目的は実現された」）が４件、Ａ-（「一部でやや不十分な点はあるものの、概ね事業計画どおりの成果をあげており、事業目的は実現されたと判断された。」）が１件、Ｂ（「事業計画をやや下回っているが、事業目的はある程度実現された。」）が２件となった。このことか

ら、各プログラムは、新型コロナウイルス感染症の影響で実渡航が大きく制限される中にもかかわらず、当初の計画に沿って目的を概ね実現し、期待された成果を挙げたものと評価できる。
　なお、本評価においては、Ａが標準的な評定である。

　今回、事後評価の対象とした各プログラムにおいて補助期間中に交流した学生の総数は、派遣された日本人学生が目標 817 名に対して実績 1,218 名、受入れた外国人学生が目標 839 名に対して実績 1,441 名であった。

　事後評価を通じて以下のような成果も確認された。
〇アフリカに関係の深い民間企業や国際協力機構（JICA）と協働してプログラムを推進し、海外連携大学及び有識者との協議や自己点検等を通じて、プログラムの質保証や改善が図られた。
〇アフリカ連合（パンアフリカン大学）との交流協定を締結し広域連携への可能性拡大を広げた。
〇過年度の受入学生が翌年度の派遣学生を支援するなど、両大学の学生の継続的な交流の回路が多重的に確保され、双方向かつ循環型の交流が実現された。
〇共通科目を新設し、国内の学生が国際協働を実践できる機会を提供し、分野や部局を超えて取組を拡大させる取組が実施されていた。
〇補助期間終了後も、学内の既存制度を活用し、同規模あるいはそれを上回る規模で、同内容の事業が継続され、加えて交流の対象を他地域にも拡大･実施されており、今後より一層の発展が期待できる。
〇プラットフォーム構築プログラムにおいて、スタートアップ型大学等へのコンサルテーションに加え、大学データベース、安全情報冊子、日本アフリカ学生交流ポータルサイトなど、今後の研究・教育交流の基盤が構築された。

　一方で、得られた成果を今後、全国の大学へ普及･展開するにあたって次のような課題も確認された。
〇コロナ禍の影響もあり、計画時に予定していた長期派遣の継続を断念してしまった大学も見受けられ、短期派遣の交流が多く見受けられたことから、今後も引き続き検討いただきたい。
〇海外連携相手大学との調整が困難だけでなく、事前の調査や制度設計の不足等により、ダブルディグリー及びジョイントディグリーに向けた交渉への対応に遅れが見受けられたため、今後の課題として引き続き実現に向けた整備、検討及び交渉を期待したい。
　これらの課題を整理し、本事業の成果はより一層、社会に還元されるものと期待される。

３．最後に
　５年という限られた補助期間において、それぞれの大学のグローバル展開力の強化に繋がる基盤の確立と同時に、事業の実施を通じて着実に知見と経験を積み上げ、成果を挙げた点は高い評価に値する。
　今後の事業継続にあたっては、国際情勢等を踏まえつつ、プログラム改善を実施する仕組みの構築やオンライン交流のさらなる活用方法についても検討するとともに、質保証を伴った真に価値あるプログラムを提供していくことが求められる。さらに今後の展開においては、JICA や日本・アフリカ大学連携ネットワーク（JAAN）との有機的・継続的な連携推進により、一層の横展開を進めることが望まれる。
　引き続き、各大学がこれまでの取組を発展的に継続し、グローバルに活躍できる人材の育成に寄与していくことを期待する。

大学の世界展開力強化事業（令和２年度採択）事後評価結果一覧

設置区分	整理番号	大学名（代表大学）	事業名	評価
国立	A①01	宇都宮大学	アフリカの潜在力と日本の科学技術融合による SDGs貢献人材育成プログラム	A
国立	A①02	山口大学	アジア・アフリカにおけるOne Health問題の解決に向けた感染症対策を担う獣医師育成プログラム	B
国立	A②01	北海道大学	アフリカと日本の架け橋となる次世代の人材を育成する国際獣医学・保全医学教育プログラム　～ザンビア-北大の頭脳循環成果を基盤として～	S
国立	A②02	○秋田大学、九州大学	南部アフリカの持続的資源開発を先導するスマートマイニング中核人材の育成	A
国立	A②03	広島大学	南北アフリカとの互恵的パートナーシップ構築のためのトライアングル海外学習プログラム	A
国立	A②04	長崎大学	プラネタリーヘルスの実現に向けた日ア戦略的共同教育プログラム	A-
私立	A②05	東京農業大学	アフリカの栄養改善活動をフィールドとする協働実践型教育プログラム	B
国立	B01	○京都大学、東京外国語大学	アフリカにおけるSDGsに向けた高度イノベーション人材育成のための国際連携教育プログラム	A

参考：評価区分

S	事業計画を上回る成果をあげており、事業目的は十分に実現された。
A	事業計画どおりの成果をあげており、事業目的は実現された。
A-	一部でやや不十分な点はあるものの、概ね事業計画どおりの成果をあげており、事業目的は実現されたと判断された。
B	事業計画をやや下回っているが、事業目的はある程度実現された。
C	事業計画を下回っており、事業目的はあまり実現されていない。
D	事業計画を大きく下回っており、事業目的はほとんど実現されていない。